

■ 外国語 ■

I 新学習指導要領の趣旨及び改善事項

1 改訂の趣旨

- 各学校段階の学びを接続させるため、国際的な基準を参考に、小・中・高等学校で一貫した、聞くこと、読むこと、話すこと [やり取り]、話すこと [発表]、書くことの五つの領域別の目標を設定。
- 互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視し、授業を外国語で行うことを基本とするとともに、具体的な課題等を設定するなどして、学習した語彙・表現などを目的・場面・状況に応じて実際に活用する活動を充実させ、言語活動の実質化を図る。

2 改訂の要点

(1) 目標の改善

【外国語の見方・考え方】

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること。

- ・授業においては、英語担当教員の英語使用や生徒の英語による言語活動の割合が改善されてきている一方で、以下の課題が依然としてみられる。
 - ① 文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれている
 - ② 「やりとり」や「即興性」を意識した言語活動が十分ではない
 - ③ 読んだことについて意見を述べ合うなど、複数の領域を統合した言語活動が不十分
- ・これらの課題を踏まえ、外国語教育において育成を目指す資質・能力を明確にした上で、各学校段階の学びを接続させるとともに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から、国際的な基準であるCEFRなどを参考に、小・中・高等学校で一貫した、聞くこと、読むこと、話すこと [やり取り]、話すこと [発表]、書くことの五つの領域別に英語の目標を設定した。
- ・「知識及び技能」と「思考力・判断力・表現力等」を一体的に育成する。これは、「活用を通して習得を図る」という考え方に立脚している。また、その過程を通して「学びに向かう力、人間性等」を育成する。

(2) 内容構成の改善

- ・「(1) 英語の特徴やきまりに関する事項」を知識及び技能として、「(2) 情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」を思考力、判断力、表現力等として、言語活動や言語の使用場面、言語の働きの例を「(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項」として整理した。
- ・その上で、知識及び技能に示す事項を活用し、言語活動を通して、思考力、判断力、表現力等を指導することとした。

(3) 学習内容の改善

- ・対話的な言語活動を重視する観点から、「話すこと [やり取り]」の領域を設定するとともに、語彙、文法などの言語材料と言語活動とを効果的に関連付けて、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにすることとした。
- ・取り扱う語彙数について、現行の1200程度の語から、五つの領域別の目標を達成するための言語

- 活動に必要となる、小学校で学習した 600～700 語に 1600～1800 程度の新語を加えた語とした
- ・中学校で取り扱う語には小学校で学習した 600～700 語を含むことを明記。このことにより、小学校で学習した語を中学校において繰り返し使用させることの必要性が示された。
 - ・文、文構造及び文法事項について、表現をより適切でより豊かにするなどの目的で、「感嘆文のうち基本的なもの」や「現在完了進行形」など数項目を追加した。

(4) 学習指導の改善・充実

- ・小・中学校の学びを接続するため、指導計画の作成に当たっては、語彙、表現などを繰り返し活用することによって、生徒が自分の考えなどを表現できるまで発信力を高めることなどを明記した。
- ・言語材料については、発達の段階に応じて、生徒が受容するものと発信するものがあることに留意して指導することを明記した。
- ・授業は英語で行うことを基本とすることを新たに規定した。
- ・教科書の改善に向けて、教材の中で五つの領域別の目標と言語材料や言語活動との関係を單元ごとに示すよう明記した。

3 具体的な改善事項 (別紙)

II 移行措置

1 移行期間中の特例

平成 30 年度から平成 32 年度までの第 1 学年から第 3 学年までの外国語の指導に当たっては、現行中学校学習指導要領第 2 章第 9 節の規定にかかわらず、その全部又は一部について新中学校学習指導要領第 2 章第 9 節の規定によることができる。

2 移行措置の解説

(1) 移行措置の内容

- ・平成 31, 32 年度の 1, 2 年生について、授業時数は追加せず、小学校・高等学校との接続の観点から、知識及び技能について新たに追加した内容と、それを活用して行う言語活動を計画的に指導する。

(2) 学習指導上の留意事項

- ・「新たに追加した内容と、それを活用して行う言語活動」の具体は、今後示される予定。

3 具体的な改善事項

学習指導要領の記述（抜粋）	解説と補足
<p>I 外国語科改訂の趣旨と要点</p> <p>1 外国語科改訂の趣旨 （「I 新学習指導要領の趣旨及び改善事項」参照）</p> <p>2 改訂の要点 （「I 新学習指導要領の趣旨及び改善事項」参照）</p> <p>II 目標及び内容</p> <p>1 教科の目標</p> <p>第1 目標</p> <p>外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p>	<p>■中学校外国語における「コミュニケーション」 「外国語で、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりすること」である。</p> <p>■「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは 外国語によるコミュニケーションの中で、 ①どのような視点で物事を捉えるか ②どのような考え方で思考していくのか ①は、「外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉える」ことに、 ②は、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築する」ことに対応する。</p> <p>■①、②についての具体（補足）※小学校外国語における補足 例えば①を、「外国語やその背景にある文化の理解の仕方」と、②を「表現するまでに、頭の中で思考している思考の仕方」と捉え直してみる。例えば①は、be good at～は「～が得意である」というように、英語に対して日本語を当てはめて理解させる方法ではなく、目的や場面、状況等の中で、その表現を使うのに最適であると児童が考えて使用できるようにすることを指している。 また、②は、『自己紹介』をするから名前、年、好きなことの3文で言ってみよう」と指導するような方法ではなく、『自己紹介』をするには、どんな内容を相手に伝えればよい？と、児童に尋ねながら内容や表現を構築させていくような指導のことである。</p> <p>■「見方・考え方」と「主体的・対話的で深い学び」との関わり 外国語によるコミュニケーションの一連の過程を通して、このような「見方・考え方」を働かせながら、自分の思いや考えを表現することなどを通じて、生徒の発達段階に応じて「見方・考え方」を豊かにすることが重要である。この「見方・考え方」を確かめ豊かなものとする中で、学ぶことの意味と自分の生活、人生や社会、世界の在り方を主体的に結び付ける学びが実現され、学校で学ぶ内容が、生きて働く力として育まれることになる。さらに、こうした学びの過程が外国語教育の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につながる。その鍵となるものが、教科等の特質に応じた「見方・考え方」である。</p>

(1) 外国語の音声や文字，語彙，表現，文構造，言語の働きなどを理解するとともに，これらの知識を，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

■「知識及び技能」とは，

「何を理解しているか（＝知識），何ができるか（＝技能）」

「知識」…「外国語の音声や文字，語彙，表現，文構造，言語の働きなどを理解する」

基礎的・基本的な知識を確実に習得しながら，既存の知識と関連付けたり組み合わせたりしていくことにより，学習内容の深い理解と，個別の知識の定着を図るとともに，社会における様々な場面で活用できる概念としていくこと。

「技能」…「上記の知識を，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる」

一定の手順や段階を追って身に付く個別の技能のみならず，獲得した個別の技能が自分の経験やほかの技能と関連付けられ，変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる技能として習熟・熟達していくこと。

＝生きて働く「知識及び技能」の習得が重要。

■生きて働く「知識及び技能」の習得とは，社会における様々な場面で活用できる概念としていくこと（補足）

ただ知っているだけではなく，場面の中で生かせるかどうか重要である。例えば，文法事項「be と～ing 形を並べると進行形になる」というのは単なる知識にすぎない。それに対して，目の前で何かが起きていることを誰かに伝える時に，「be+～ing 形」を使って表現すると，今起こっていることが伝えられる。電話で友人に Mr. Suzuki is playing soccer now. と伝えることは，スピーキングの技能を使って，「be+～ing 形」という知識を生かして，コミュニケーションの中で活用できていることになる。それが場面の中で使える知識ということ。現行の指導要領と同じ考え方。

(2) コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，日常的な話題や社会的な話題について，外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり，これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

■「思考力，判断力，表現力等」とは，

「理解していること・できることをどう使うか」

■「思考力，判断力，表現力等」の育成のためには，外国語を実際に使用することが不可欠である。

■未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成（補足）

コミュニケーションするときは，未知の状況の連続である。未知の状況を授業の中で多く作らないと，コミュニケーションにならない。それらに英語でどう対応するかということを言語活動として行うことが，思考力・判断力・表現力等の育成においては，一番の基となる。

(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

■どのような学習過程を経て「思考力、判断力、表現力等」を高めていくことが大切か

①設定されたコミュニケーションの目的や場面、状況等を理解する、②目的に応じて情報や意見などを発信するまでの方向性を決定し、コミュニケーションの見通しを立てる、③目的達成のため、具体的なコミュニケーションを行う、④言語面・内容面で自ら学習のまとめと振り返りを行う、といった流れの中で、学んだことの意味付けを行ったり、既得の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動で活用したりすることで、「思考力、判断力、表現力等」を高めていく。

■「聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら」について

五つの領域にわたってコミュニケーションを図る資質・能力をバランスよく育成することや、領域統合型の言語活動を重視していることなどからである（小学校の外国語科では「他者に配慮」）。

■「積極的に」から「主体的に」へ

改訂前「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」

改訂後「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」

改訂の理由として、これまでに「積極的に」を「元気いっぱい」、何度も挙手をして」などとやや偏った見方で児童を称賛してきたという経緯がある。おとなしい児童にも「主体的な」児童はいる。（小学校外国語補足より）授業の中だけの積極的な態度のみならず、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとする態度を養うことを目標としている。学校教育法の「主体的に学習に取り組む態度」との整合を図るためでもある。

■「学びに向かう力、人間性等」とは、

「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」

■「学びに向かう力、人間性等」は、

「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力を一体的に育成する過程を通して育成する必要がある。

■第1の(1) = 知識及び技能

(2) = 思考力、判断力、表現力等

(3) = 学びに向かう力、人間性等

第2 各言語の目標及び内容等

英語

1 目標

英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、書くことの五つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1の(1)及び(2)に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1の(3)に示す資質・能力を育成する。

(1) 聞くこと

ア はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要な情報を聞き取ることができるようにする。

イ はっきりと話されれば、日常的な話題について、話の概要を捉えることができるようにする。

ウ はっきりと話されれば、社会的な話題について、短い説明の要点を捉えることができるようにする。

(2) 読むこと

ア 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする。

イ 簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。

ウ 社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。

■聞くこと ア

- ・「必要な情報を聞き取る」
自分の置かれた状況などから判断して必要な情報を把握すること

■聞くこと イ

- ・「概要を捉える」
一つの話題に沿って話されるものなど、内容に一貫性のある英語を最後まで聞き、特定の部分にとらわれず、話全体のあらましを捉えること

■聞くこと ウ

- ・「社会的な話題」
中学校では社会的な話題まで扱うことに留意する。
- ・「要点を捉える」
話し手が伝えようとする最も重要なことは何であるかを判断して捉えること

■読むこと ア

- ・「必要な情報を読み取る」
目的に応じて、また自分の置かれた状況などから判断して必要な情報を把握すること

■読むこと イ

- ・「概要を捉える」
まとまりのある文章を最後まで読み、特定の部分にのみとらわれず、登場人物の行動や心情の変化、全体のあらすじなど、書き手が述べていることの大まかな内容を捉えること

■読むこと ウ

- ・「社会的な話題」
中学校では社会的な話題まで扱うことに留意
- ・「要点を捉える」
最後まで読み、複数の情報から、書き手が最も伝えたいことは何であるかを判断して捉えること

■「聞くこと・読むこと」指導のポイント（補足）

- ・「通して聞く・読む」
テキストを最初から最後までを一気に聞く・読む活動を仕組むことが重要。一気に聞く・読むとなると、学年段階で文量の違いはあるが、細切れにしてはあまり意味がない。テキストは、全体でこそ意味がある。目的や場面、状況等を設定すれば、必然的に聞く・読むことになる。そのことが読むことの目標を具現する。

(3) 話すこと [やり取り]

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。

イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。

ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。

■話すこと[やり取り] ア

- ・「関心のある事柄」
身の回りのことで生徒が共通して関心をもっていることを扱う。
- ・「即興で伝え合う」
原稿を事前に用意してその内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備時間を取ることなく、不適切な間を置かずに相手と事実や意見、気持ちなどを伝え合うこと

■話すこと[やり取り] イ

- ・「整理する」
聞き手が理解しやすいように伝える項目を精選したり適切な順序に並べ替えたりするなど、話す内容をまとめ、コミュニケーションの見通しを立てること
- ・「相手からの質問に答える」
アで培われた、対話を継続・発展させる力を活用することを含んでいる。

■話すこと[やり取り] ウ

- ・「述べ合う」
共通の話題をきっかけとして、ペアやグループになってお互いに意見を出し合ったり、情報の交換をしたりしながら、話題に関する理解を深め、意見をまとめたり、合意できる部分やできない部分を整理し、その理由を述べ合ったりすること

■「話すこと」[やりとり] 指導のポイント (補足)

- ・ア「関心のある事柄を即興で」
例えば、What's your favorite sport?というテーマを提示し二人で My favorite sport is ~.と伝え合う場合、まず対話を書かせてから練習、発表といった手順がよくあるが逆である。まずは、その場で伝え合い、そのあとで書く。このような即興的な対話をさせることに鑑み、話題は「関心のある事柄」と最もハードルが低いものに押さえてある。
- ・イ「整理するのは頭の中で」
限られた時間で、ある程度まとまった考え等を用意して、相手に伝える力を身に付けさせる。その際、きちんと原稿を用意するのではなく、何を話すか頭の中で整理すること。ただし、指導の最初の段階ではメモの用意が必要な場合もある。
- ・ウ「内容こそ全て」
様々な社会的な話題が教科書では多く取り扱われている。それらを活用し、コンテンツとしてコミュニケーションの題材とする。ここでは、言語材料ベースの言語活動のイメージはない。

(4) 話すこと [発表]

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。

イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある内容を話すことができるようにする。

ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする。

(5) 書くこと

ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができるようにする。

イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いてまとまりのある文章を書くことができるようにする。

ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。

2 内容

[知識及び技能]

(1) 英語の特徴やきまりに関する事項

実際に英語を用いた言語活動を通して、小学校学習指導要領第2章第10節外国語第2の2の(1)及び次に示す言語材料のうち、1に示す五つの領域別の目標を達成するのにふさわしいものについて理解するとともに、言語材料と言語活動とを効果的に関連付け、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けることができるよう指導する。

■話すこと[発表] ア

・「即興で話す」

事前に原稿を書いてそれを暗唱したりするのではなく、興味・関心のある事柄であれば、既習の知識や技能を生かしてその場で話せるようにする必要がある。

■話すこと[発表] イ

・「まとまりのある内容を話す」

改訂前の「話すこと」の言語活動(ウ)「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること」と関連があり、例えば一つのテーマに沿った発表をしたり、内容に一貫性があるスピーチをしたりすること

■話すこと[発表] ウ

・「考えたことや感じたこと、その理由などを話す」

社会的な話題に関して聞いて分かった情報や、文章を読んで考えたり感じたりしたことなどを活用し、聞き手に話して伝えること

■書くこと ア

・「正確に書く」

文構造や文法事項を正しく用いて正しい語順で文を構成することや、伝えたいことについての情報を正確に捉え、整理したり確認したりしながら書くこと

■書くこと イ

・「整理する」メモなどを基にして書く。

・「まとまりのある文章を書く」

文と文の順序や相互の関連に注意を払い、全体として一貫性のある文章を書くこと

■書くこと ウ

・「考えたことや感じたこと、その理由などを書く」

「聞いたり読んだりしたこと」の要点を捉え、自分が考えたことや感じたことを、その理由を交えて書くことができること

■小・中接続

小・中学校の学びの接続及び連続性の観点から、小学校で学んだ語彙や表現などについて、中学校の言語活動で、意味のある文脈の中でコミュニケーションを通して繰り返し触れることができるよう様々な言語活動を工夫し、言語の運用能力を高めることが必要である。

■今回の改訂で、言語材料は小学校の学習指導要領にも示されている。小学校の学習指導要領もよく理解し、言語材料を繰り返し指導すること。

ア 音声

次に示す事項について取り扱うこと。

- (ア) 現代の標準的な発音
- (イ) 語と語の連結による音の変化
- (ウ) 語や句、文における基本的な強勢

(エ) 文における基本的なイントネーション

(オ) 文における基本的な区切り

イ 符号

感嘆符、引用符などの符号

ウ 語、連語及び慣用表現

(ア) 1に示す五つの領域別の目標を達成するために必要となる、小学校で学習した語に1600～1800語程度の新語を加えた語

(イ) 連語のうち、活用頻度の高いもの

(ウ) 慣用表現のうち、活用頻度の高いもの

■小学校 外国語科で取り扱う内容

イ 文字及び符号

(ア) 活字体の大文字、小文字

(イ) 終止符や疑問符、コンマなどの基本的な符号

ウ 語、連語及び慣用表現

(ア) 第3学年及び第4学年において第4章外国語活動を履修する際に取り扱った語を含む600～700語程度の語

(イ) 連語のうち、get up, look atなどの活用頻度の高い基本的なもの

(ウ) 慣用表現のうち、excuse me, I see, I'm sorry, thank you, you're welcomeなどの活用頻度の高い基本的なもの

■ア(イ) 平叙文・wh-疑問文を上昇調のイントネーションで発音する場合もあるなど、型通りのイントネーションではなく、文脈によって幅広く使い分けられるように指導する。

■ウ(ア)1200語から1600～1800語程度へ増加

前回改訂と比べると増加幅が大きく見えるが、

①言語活動の中で無理なく扱うことのできる程度の語数である(小学校学んだ語と関連付けながら、語彙を増やしていくことを考えれば)。

②3年間で扱われている語数の合計が1200語程度をかなり上回っている(平成28年度版検定教科書6者)。

③上記の語彙数は、主として受容語彙として教材等を提示する際の範囲を示しており、学習を繰り返すうちに徐々に定着が深まり、受容から発信への転換が促進されるように指導していく必要がある。

■受容語彙と発信語彙

生徒の発達の段階に応じて、聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき語彙(受容語彙)と、話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙(発信語彙)とがあり、ここで示されている語数の全てを生徒が発信できるようにすることが求められているわけではないことにも留意する。

・ウ(ウ) 慣用表現では、論理的表現を求めていくため、first of all, on the other handなど、順序立てて論理的に伝えたり、相手に分かりやすく自分の考えを表現したりする際に活用できるものを適切に使えるよう指導する。

エ 文、文構造及び文法事項

小学校学習指導要領第2章第10節外国語第2の2の(1)のエ及び次に示す事項について、意味のある文脈でのコミュニケーションの中で繰り返し触れることを通して活用すること。

(ア) 文

a 重文、複文

b 疑問文のうち、助動詞 (may, willなど) で始まるものやorを含むもの、疑問詞 (which, whose) で始まるもの

c 感嘆文のうち基本的なもの

(イ) 文構造

a [主語+動詞+補語]のうち、主語+be動詞以外の動詞+名詞

形容詞

b [主語+動詞+目的語]のうち、

(a) 主語+動詞+動名詞

to不定詞

how (など) to不定詞

(b) 主語+動詞+thatで始まる節

whatなどで始まる節

c [主語+動詞+間接目的語+直接目的語]のうち、

(a) 主語+動詞+間接目的語+名詞

代名詞

(b) 主語+動詞+間接目的語+how (など) to不定詞

(c) 主語+動詞+間接目的語+thatで始まる節

whatなどで始まる節

d [主語+動詞+目的語+補語]のうち、

(a) 主語+動詞+目的語+名詞

形容詞

(b) 主語+動詞+目的語+原形不定詞

e その他

(a) There+be動詞+～

(b) It+be動詞+～ (+for～) +to不定詞

(c) 主語+tell, wantなど+目的語+to不定詞

(d) 主語+be動詞+形容詞+thatで始まる節

(ウ) 文法事項

a 代名詞

(a) 人称や指示、疑問、数量を表すもの

(b) 関係代名詞のうち、主格のthat, which, who, 目的格のthat, whichの制限的用法

■小学校 外国語科で取り扱う内容

エ 文及び文構造

(ア) 文

a 単文

b 肯定、否定の平叙文

c 肯定、否定の命令文

d 疑問文のうち、be 動詞で始まるものや助動詞 (can, do など) で始まるもの、疑問詞 (who, what, when, where, why, how) で始まるもの

e 代名詞のうち、I, you, he, she などの基本的なものを含むもの

f 動名詞や過去形のうち、活用頻度の高い基本的なものを含むもの

(イ) 文構造

a [主語+動詞]

b [主語+動詞+補語]のうち、
名詞

(a) 主語+be 動詞+ 代名詞
形容詞

c [主語+動詞+目的語]のうち、
(a) 主語+動詞+名詞
代名詞

【新設】c 感嘆文は、既に中学校で一般的な言語材料として扱われている実態があることを考慮。
How interesting! What a big tree!

・後ろにS Vが来るものは想定していない。

【新設】c (c)は、直接目的語に that で始まる節や what などで始まる節を置いたもの。tell や show などの動詞を使った表現の幅を広げるため。

I'll show you that this is not true.

Can I tell her where you live?

【新設】d (b) 補語が原形不定詞の場合については、小学校において“Let's...”や“Let me try!”といった表現に触れている実態があることを考慮。

Will you let me try?

I helped my father wash the car.

【新設】e (d) sure や glad などの感情や心理を表す形容詞の後に that 節を続けたもの。改訂前において、すでにどの教科書でもこの文構造を扱っていることを踏まえた。

I'm glad that you like it.

I'm sure that many people will live with a robot in the future.

b 接続詞

c 助動詞

d 前置詞

e 動詞の時制及び相など

現在形や過去形，現在進行形，過去進行形，現在完了形，現在完了進行形，助動詞などを用いた未来表現

f 形容詞や副詞を用いた比較表現

g to不定詞

h 動名詞

i 現在分詞や過去分詞の形容詞としての用法

j 受け身

k 仮定法のうち基本的なもの

【新設】

【新設】

【新設】

【新設】e 現在完了進行形は，動作の「継続」を表す際，現在完了形より適切に表現できる場合があることを考慮。

It has been raining since this morning.

Masashi and Yukio have been playing soccer for two hours.

・本来，上記のように表現すべきところ，現行では現在完了形で代用しているため。

■小学校での過去形の指導と小・中接続について

小学校の外国語科においては，基本的な表現として過去形を含む文を指導することになっているが，過去形を文から取り出して指導することはしない。例えば，行ったことのある場所を伝える時に，“I went to ～.”と表現することを指導するが，went の部分に焦点をあてて，go の過去形であることや，主語が三人称単数であっても -s にしないことなどの過去形の使い方を理解させるわけではない。

中学校の早い段階で，こうした小学校で学んだ表現も取り上げ，音声で十分慣れ親しんだ過去形を読んだり書いたりできるようにしたり，過去形の使い方 の理解を深めたりしながら，別の場面や異なる表現の中で活用できるように指導することが重要である。

■f 比較表現とは？

改訂前：(オ)形容詞及び副詞の比較変化

改訂後：原級を用いた文の例

I am twice as old as Mike.

比較級を用いた文の例

Masashi is two years younger than David.

・論理的に表現するために比較表現を幅広くした。

【新設】 ■k 仮定法のうち基本的なもの

従来，言語活動において，本来現実にはない仮定や想定を話したり書いたりする場面で，直説法の条件文を用いて表現することが多かったが，仮定法を追加することにより，正しい文法事項を用いて表現することができるようにした。例えば，本来“If I had my own computer, I could get some information on the Internet.”と表現すべきところを，“If I have my own computer, I can get some information on the Internet.”と表現していたため。(中略)また，考えや気持ちを述べる場面でも仮定法を用いることで，表現の広がりや深まりとともに一層充実した言語活動を行うことが期待される。

〔思考力、判断力、表現力等〕

(2) 情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項

具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、これらを論理的に表現することを通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 日常的な話題や社会的な話題について、英語を聞いたり読んだりして必要な情報や考えなどを捉えること。

イ 日常的な話題や社会的な話題について、英語を聞いたり読んだりして得られた情報や表現を、選択したり抽出したりするなどして活用し、話したり書いたりして事実や自分の考え、気持ちなどを表現すること。

ウ 日常的な話題や社会的な話題について、伝える内容を整理し、英語で話したり書いたりして互いに事実や自分の考え、気持ちなどを伝え合うこと。

(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項

① 言語活動に関する事項

(2)に示す事項については、(1)に示す事項を活用して、例えば次のような言語活動を通して指導する。

ア 小学校学習指導要領第2章第10節外国語の第2の2の(3)に示す言語活動のうち、小学校における学習内容の定着を図るために必要なもの。

イ 聞くこと

(ア) 日常的な話題について、自然な口調で話される英語を聞いて、話し手の意向を正確に把握する活動。

(イ) 店や公共交通機関などで用いられる簡単なアナウンスなどから、自分が必要とする情報を聞き取る活動。

(ウ) 友達からの招待など、身近な事柄に関する簡単なメッセージを聞いて、その内容を把握し、適切に応答する活動。

■ア「必要な情報や考えなどを捉える」とは

目的や場面、状況などに応じて何を聞き取らなければならないか、あるいは読み取らなければならないのかを判断し、聞いたり読んだりして理解した情報を整理したり、吟味したり、既にもっている知識と照らし合わせて関連付けたりして、必要な情報や考えなどを理解すること。

■ウ「伝える内容を整理」するとは

必ずしもいつも十分な準備をした上で言語活動をすべきということを意味しているわけではない。メモ書きなどの補助を利用しつつ、即興で話したり書いたりする活動を行い、その過程で相手からフィードバックを受けたり、同じタスクを相手や役割を変えながら複数回繰り返しながら学びを深めていくことも重要である。書く際にも、推敲を重ねる中で、徐々に伝える内容を整理していくことも重要な学習過程である。そのため、実際の指導の際には、最初から流暢かつ正確な英語使用を求め過ぎない配慮が必要。

■「言語活動及び言語の働きに関する事項」

(2)に示す「思考力、判断力、表現力等」を育成するに当たり、(1)の「知識及び技能」に示す事項を活用して、英語の目標に掲げられた五つの領域ごとの具体的な「①言語活動に関する事項」に示された言語活動を通して指導することや、「②言語の働きに関する事項」を適切に取り上げて指導が行われる必要がある。

■聞くこと(イ)指導のポイント

言語活動を行うに当たっては、聞く際の状況や目的を明示して、どういう情報が必要かを考えさせた上で、その部分に集中して聞き取る活動を行わせる。例えば、カメラなどの商品のコマーシャルが題材の場合、最初に聞く際には「どのような機能があるのか知りたい」、次に聞く際には「値段を知りたい」など、聞き手が置かれた状況の設定を行う。

■聞くこと(ウ)指導のポイント

依頼や提案などの話し手からの働き掛けに対する反応の仕方は、場面や状況、聞き手によって様々である。したがって、場面などの設定に工夫をしながら様々な活動を行わせ、どのような応答があり得るか考えさせることが大切である。また、単純に応答するだけでなく、相手の言ったことに対して確認したり交渉したりするなど、やり取りを伴う応答も指導する必要がある。

(エ) 友達や家族、学校生活などの日常的な話題や社会的な話題に関する会話や説明などを聞いて、概要や要点を把握する活動。また、その内容を英語で説明する活動。

ウ 読むこと

(ア) 書かれた内容や文章の構成を考えながら黙読したり、その内容を表現するよう音読したりする活動。

(イ) 日常的な話題について、簡単な表現が用いられている広告やパンフレット、予定表、手紙、電子メール、短い文章などから、自分が必要とする情報を読み取る活動。

(ウ) 簡単な語句や文で書かれた日常的な話題に関する短い説明やエッセイ、物語などを読んで概要を把握する活動。

■聞くこと(エ)指導のポイント

「概要や要点を把握」することの指導に当たっては、話の概要を捉える際にはどのようなことが話されているかを、話し手の最も伝えたいところはどこかなどを考えながら、会話や説明などを聞くように生徒にあらかじめ伝えておくようにする。なお、この事項では、「理解した」とはどのような状態のことであるかを改めて示している。つまり、聞いた内容を話したり書いたりして説明することができる段階まで至ることを「理解した」状態であると考えられることもできる。

■読むこと(ア)指導のポイント

音読の指導に当たっては、単なる練習としての音読にとどまることのないよう、指導者も学習者も、書かれた文章の本来の目的を確認した上で、そもそも音読することがふさわしいのか、ふさわしいとすればその音読はどのような目的で行われるのかを明確に意識することが重要である。さらに、学習の段階や言語活動の流れの中で、音読することの目的や意義を教師も生徒も意識する必要がある。

■読むこと(イ)指導のポイント

「日常的な話題」に関して、できるだけ現実に近い場面を設定するとともに、逐語的な読みから脱却し、自分が必要とする情報を捉えさせることが大切である。例えば、簡単な語句や短い文で書かれたスポーツクラブのパンフレットを複数示し、自分が通うことのできる曜日に自分が体験したいスポーツを実施しているクラブはどれなのかを探させるなどの活動が考えられる。読み手として主体的に考えたり、判断したりしながら理解していくことが必要。

■読むこと(ウ)指導のポイント

学習者のレベルに合ったまとまりのある文章を最初から最後まで通して読む機会をできるだけたくさん設定することが必要である。この際も、逐語的な読みから脱却し、意味のまとまりごとに英文を捉えさせることが必要である。例えば、諸外国の中学校生活を紹介している短い文章を読む際に、それぞれの情報の関係を示す接続詞に注目させながら文章の流れを理解するためのキーワードを拾わせ、全体としての内容を数文の英語でまとめさせたりするなどの活動が考えられる。また、友人や教師が休日を過ごした中で感じたことなどのエッセイを読む際には、出来事を時系列に沿って整理させ、どんな内容を伝えようとしているのかを絵や簡単な英語で表現するなどの活動が考えられる。ペアやグループになり、読み取れたことについて生徒同士が考えを交流するなど、学習形態の工夫をすることも大切。

(エ) 簡単な語句や文で書かれた社会的な話題に関する説明などを読んで、イラストや写真、図表なども参考にしながら、要点を把握する活動。また、その内容に対する賛否や自分の考えを述べる活動。

■読むこと(エ)指導のポイント

(ウ)の活動を通して身に付けた概要を把握する力と関連付け、文章全体としての構成や論理の展開を押さえさせた上で、読む目的に応じた要点を把握させることが大切である。その際、収集・整理した複数の情報を取り出して総合的に判断し、内容に対する感想や賛否、自分の考えなどを話したり書いたりして表現するなど、要点を把握するだけで終わるのではなく、領域間の統合的な言語活動を工夫することが大切である。例えば、地球温暖化などの環境問題に関する説明文を読み、イラストや図表なども参考にしながら筆者の主張を数文でまとめた上で、自分ができることなどについてペアやグループで尋ね合ったり伝え合ったり、さらにそれを簡潔に書いて表現する活動へと発展させたりすることなども考えられる。

エ 話すこと [やり取り]

(ア) 関心のある事柄について、相手からの質問に対し、その場で適切に応答したり、関連する質問をしたりして、互いに会話を継続する活動。

■話すこと [やり取り] (ア)指導のポイント

会話の継続・発展に必要なこと

- ①相手に聞き返したり確かめたりする
(Pardon? / You mean..., right? など)
- ②相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりする
(I see. / Really? / That's nice. など)
- ③相手の答えを受けて、自分のことを伝える
(I like baseball, too. など)
- ④相手の答えや自分のことについて伝えたことに「関連する質問」を付け加える
(What kind of Japanese food do you like? / How about you? など)

自ら話のきっかけを作ったり対話を始めたりすること会話の流れに応じて関連する多様な質問を即座にしたりする場面を様々な言語活動の中に設定する。指導の重点を「内容の伝達」に置いた上で、

- ①活動中の言語使用について具体的にフィードバックする。
- ②活動後に生徒が自分の使用した英語について振り返り、場面に応じた適切な表現方法を確認する機会を与える。

(イ) 日常的な話題について、伝えようとする内容を整理し、自分で作成したメモなどを活用しながら相手と口頭で伝え合う活動。

■話すこと [やり取り] (イ)指導のポイント

大まかな流れや主要な点を書いたメモに基づいて伝え合うなど段階的に指導する。

- ①生徒の実態や習熟の程度を考慮し、考えを整理するための時間を設定する。
- ②詳細なメモからキーワードのみによるメモまで、作成する「メモ」の条件を適切に示す。

(ウ) 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき、読み取ったことや感じたこと、考えたことなどを伝えた上で、相手からの質問に対して適切に応答したり自ら質問し返したりする活動。

オ 話すこと [発表]

(ア) 関心のある事柄について、その場で考えを整理して口頭で説明する活動。

(イ) 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどをまとめ、簡単なスピーチをする活動。

(ウ) 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき、自分で作成したメモなどを活用しながら口頭で要約したり、自分の考えや気持ちなどを話したりする活動。

カ 書くこと

(ア) 趣味や好き嫌いなど、自分に関する基本的な情報を語句や文で書く活動。

(イ) 簡単な手紙や電子メールの形で自分の近況などを伝える活動。

(ウ) 日常的な話題について、簡単な語句や文を用いて、出来事などを説明するまとまりのある文章を書く活動。

■話すこと [やり取り] (ウ) 指導のポイント

- ① 聞いたり読んだりする前に教師や生徒、又は生徒同士がやり取りを行い、テーマに関連した情報を共有したり整理したりする。その上で、
- ② 意見などを形成する段階において生徒が発話した語句を取り上げる。それを基に、
- ③ 教師が簡単な文として言い換えて例示する。

■話すこと [発表] (ア) 指導のポイント

- ① 一度説明した後で、ペアやグループでよりよい説明の仕方や表現について振り返る機会を作る。
- ② ネイティブ・スピーカーの説明をモデルとして聞き、効果的な説明の仕方を確認したりした後で、類似した話題や事柄を取り上げ、再度口頭で説明する活動に取り組む機会を設ける。

■話すこと [発表] (イ) 指導のポイント

- スピーチをする目的を明確にする。
- ① 自分のことをよりよく知ってもらう。
 - ② 興味・関心のある事実とそれに対する考えや気持ちなどを伝えることで聞き手に「考えるきっかけを与える」「行動を促したりする」。

■話すこと [発表] (ウ) 指導のポイント

発表の内容や様子を振り返る機会を設ける。発表の内容や構成、表現などについてよくできていた点を賞賛するとともに、具体的な助言を与えるなどして生徒自身が新たな課題を把握させる。こうした言語活動の積み重ねにより考えたり感じたりしたことをより適切に表現できるようにする。

■書くこと (ア) 指導のポイント

日頃から、自分の考えや気持ちをペアやグループで簡単な語句や文を用いて口頭で伝える活動をした後に、その内容を書いてまとめる、といった言語活動を設定することが考えられる。

■書くこと (イ) 指導のポイント

生徒が関心をもっている身近な話題や生徒の体験などと関連付けて扱うなどして、意欲的に書く機会を増やす工夫を行う。

■書くこと (ウ) 指導のポイント

- それぞれの言語活動を関連付けた段階的な指導
- ① 書き手は、テーマや話題に関する情報やキーワードを、順序を意識しながらメモする。
 - ② そのメモを基に、簡単な語句や文を用いて書き表す。
 - ③ 書き表したものを、ペアやグループになって聞いてもらったり読んでもらったりする。
 - ④ 聞き手又は読み手は、その内容について質問したり、コメントを述べたりする。
 - ⑤ 書き手は、やり取りした内容を参考に推敲する

(エ) 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたこと
から把握した内容に基づき、自分の考えや気持ち、
その理由などを書く活動。

② 言語の働きに関する事項

言語活動を行うに当たり、主として次に示すような
言語の使用場面や言語の働きを取り上げるようにす
る。

ア 言語の使用場面の例

(省略)

イ 言語の働きの例

(省略)

Ⅲ 指導計画の作成と内容の取扱い

3 指導計画の作成と内容の取扱い

(1)ア～イ (省略)

ウ 実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝
え合うなどの言語活動を行う際は、2の(1)に示す
言語材料について理解したり練習したりするた
めの指導を必要に応じて行うこと。また、小学校第
3学年から第6学年までに扱った簡単な語句や基
本的な表現などの学習内容を繰り返し指導し定着
を図ること。

エ 生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授
業を実際のコミュニケーションの場面とするた
め、授業は英語で行うことを基本とする。その際、
生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにす
ること。

(以下、オ、カ、キ、(2)、(3)、第3 省略)

■書くこと(イ) 指導のポイント

一連の活動を順序よく組み合わせた指導

- ①テーマや話題から想起されるアイディアにつ
いてのマッピングなどを利用し、思考や情報の
整理を行う。
- ②その内容についてペアやグループで、相互に説
明したり質問したりする。
- ③個に戻り、それぞれの考えや気持ちを発展させ
たり、深化させたり、情報を追加したりして、
マッピングに加筆する。
- ④マッピングに書き出した項目のうち、内容的に
つながりのあるアイディアを組み合わせ、考え
や情報の整理を再度行って書く。

【新設】 ■イ言語の働きの例(イ) 仮定する

現行においても直説法で条件を示す「仮定する」
働きとしての指導はしているが、現実ではない状況
を想像して「仮定する」働きとして表現する指導は
追加事項である。場面や状況を明確にした上で、必
要に応じて対比するなどしながら指導する。

■「繰り返し指導し定着を図ること」について

言語活動は、まず、「実際に英語を使用して互いの
考えや気持ちを伝え合うなど」の活動を基本に考え
なければならない。(中略) その上で、2(1)に示す
言語材料について「理解したり練習したりするた
めの指導」を必要に応じて行うことができるように指
導計画を作成することが大切である。

■「授業は英語で行うことを基本とする」について

この配慮事項は、①生徒が授業の中で「英語に触
れる機会」を最大限に確保すること、②授業全体を
英語を使った「実際のコミュニケーションの場面」
とすることをねらいとしている。また、英語による
言語活動を行うことを授業の中心に据えることを意
味する。(中略) 教師が授業中に積極的に英語を使用
することで生徒とのやり取りが豊富になる。言語活
動においては、「実際に英語を使用して互いの考えや
気持ちを伝え合うなど」のコミュニケーションが中
心となることから(中略)。また、発話の速度や明瞭
さを調整するとともに、使う語句や文などをより平
易なもので言い直したり、繰り返したり具体的な例
を提示したりするなどの工夫をする必要がある。

■上記の補足(真の目的は授業改善)

(もし日本語での文法説明や本文の和訳などに偏
った授業を行っていたなら)今の授業における教師
の発話をそのまま英語にするわけではない。授業そ
のものを、いかに生徒が英語を使えるようにするか
改善することが目的であり、教師は生徒に英語使用
のきっかけを与え、支援する立場である。